

昭和七年遭難後の 重光葵公使と別府での動向

小 玉 洋

一 重光葵のプロフィール

重光葵は、明治二十年（一八八七）、大野郡長の重光直なおま彦の二男として三重町で生まれた。十一歳で母松子の兄重光彦三郎の養子となり、国東市安岐町山口の重光家を嗣いだが、杵築市本庄の実家で育った。杵築中学校から、熊本の五高大学予科独法科を経て、明治四十四年東京帝国大学独法科を卒業した。同年高等文官外交科に合格し、二四歳でドイツ、以後イギリス・アメリカ勤務の後、大正八年（一九一九）には、第一次世界大戦の講和全権随員を勤めた。

昭和四年（一九二九）に上海駐在総領事となり、翌年代理公使となる。満州事変中の昭和七年一月に勃発した上海事変に当たって、同年四月二十九日が、重光駐華公使にとっては「運命の日」となった。その日は天長節（天皇誕生日）にあ

たり、上海でも新公園で、白川大将をはじめ陸海軍武官・外交官臨席の観兵式が催された。式の終わりに「君が代」を斉唱していたときに、朝鮮の独立運動家が投げた爆弾により、重光も重傷を負った。病院で停戦協定に署名した後、政府より派遣された九大医学部の後藤博士の執刀により、右足を太ももから切断したのである。（重光葵『隻脚記』）

昭和八年四月、別府市での療養後上京した隻脚公使は、異例の抜擢を受け外務次官に就任、次の岡田啓介内閣でも留任して外相広田弘毅こうきを補佐し、「広田三原則」（中国本土不可侵・門戸開放・防共協力）を推進した。彼は二・二六事件後の同十一年十一月に駐ソ大使となったが、同十三年に発生した張鼓峯事件ちやうこほうの解決に当たってソ連と強く渡り合った。このことが後になって、重光がA級戦犯とされる一因となった。翌十四年五月のノモンハン事件のときには、駐英特命全権大使としてロンドンに赴任していた。

この年九月に第二次世界大戦が始まった。同十六年十二月八日、東条内閣は米国に対して宣戦布告、英国・オランダとも戦争を始めた。重光は同年十二月に中華特命全権大使に任命され赴任、同十八年四月に東条内閣の外務大臣に就任、同十九年七月から二十年四月にかけては、小磯内閣の外務大臣

として留任し、大東亜大臣を兼任した。

ポツダム宣言を受諾

した鈴木内閣の後を受けて、同年八月十七日に東久邇宮稔彦内閣が

誕生すると、重光は三

度外相となった。同年

九月二日、軍艦ミズー

リ号上において日本政

府を代表して降伏文書に署名した。このとき陸海軍を代表し

て調印したのは、中津市出身の梅津美次郎参謀総長であった。

二人とも東京裁判開始直前に逮捕され、巣鴨刑務所に収容さ

れた。重光は裁判で禁固七年の判決を受け服役、同二十五年

十一月に仮出所した。翌年十一月七日刑期満了。この年九月

にサンフランシスコで対日平和条約調印、(翌年四月発効)。

重光は昭和二十七年六月に結党して間もない改進黨総裁に就任し政界に復帰した。彼は多くの著作・手記・関係文書を

遺したが、『昭和の動乱』(中央公論社一九五二年)は最初の

著作で、当時のベストセラーとなった。この本に、「降伏文



降服文書調印式 戦艦ミズリー号にて

書が調印せられて数時間の後、九月二日の夕べ、外務省の横浜出張員鈴木九万公使が、マッカーサー司令部から、日本全域に亘って軍政を布告する命令写しを受け取った。(中略)記者(重光)は翌九月三日早朝横浜に至り、総司令部においてマッカーサー総司令官にサザランド参謀総長同席の上会見し軍政を布くことを中止させている。

昭和二十九年十二月、第一次鳩山一郎内閣の副総理・外相に就任。同三十年三月、第二次鳩山内閣成立、副総理・外相。同年十一月十五日、自由民主党結成さる(保守合同)。同月二十二日第三次鳩山内閣成立、副総理・外相。同三十一年八月十日ソ連のフルシチョフ書記長・ブルガーニン首相と会談。同年十二月十八日、国連加盟を認められた日本代表として第一一回総会で、国際社会への復帰を宣言した。翌年一月二十六日に死去、享年六九歳であった。

墓のある安岐町には、彼の遺品を納めた山溪偉人館があるが、神奈川県湯河原の別荘に重光墓記念館があり、関係史料は衆議院憲政記念館に収蔵されている。しかし、外交官・政治家として昭和前期の政策決定の中枢に位置していた重光葵を知るには、関係した多くの人々の評伝・著作・関係資料に眼を通さねばならないのである。そこで『近現代日本人物資

料情報辞典2』(吉川弘文館二〇〇五年刊)の重光葵の項を紹介したい。執筆者は『重光葵と戦後政治』(吉川弘文館・二〇〇二年)の著者武田友巳である。

二 重光葵公使の別府療養

上海で遭難した重光公使は、九大医学部の後藤外科で第二の右脚切断手術を行い、さらに左脚、右手から残っている弾片を摘出した。重光公使が療養のため別府市に向かったのは、昭和七年八月一日であった。当日の様子を大阪毎日新聞西部毎日(第三〇四六号・昭和七年八月二日付け)より紹介しよう。(以下の記事は『重光葵写真集』昭和六十二年・向陽祭記念事業実行委員会発行より転載)

見出しは「我らの重光公使車窓に万歳郷党の感激・再度の奉公を誓ひつつ無事別府に着く」とあり、車椅子に座った和服姿の重光氏の写真が載っている。

(前略)途中立石駅から車中に訪ふと、公使は車内のベツトに坐り、傍らには香り高い蘭の植木鉢など置いてあり、一月程前つんだ髪は伸び面やつれし、痛々しい姿のうちにも元気を見せ、列車が郷里八坂村附近を通過する時は

窓外に展開する懐かしい郷里の山川の風光を眺めながら、福岡から同行の秘書浅賀書記官、九大後藤外科の下田博士、同郷の県会議長八坂三治氏、別府市外亀川町長笠置雪治氏や近親者らと語らいつつ列車が杵築駅に着くと、駅頭に向へた郷里の八坂村長林直氏、杵築町長、有志、其他公共団体代表者が重光公使の万歳を三唱し(中略)かくて日出、亀川駅頭ともそれぞれ町の代表者、その他盛んな出迎へがあり、同午後一時六分別府駅着。田口知事、平山別府市長、九大温泉治療研究所の高安、松尾両博士、その他官民多数の出迎へ者に丁寧な挨拶をなし、附添者に助けられて、自動車に移乗、九大温泉治療研究所に入り、ここでも地元多数出迎へあり、研究所の二階東側病棟の海に面して眺望のよい一等室に落着いた。

(中略)

「入院は一月、別府で静養」「重光公使を迎へて光栄だと語る高安博士」(小見出しの後に続けて)主治医の九大後藤外科の平田博士は語る。後藤博士を始め私が重光公使の看護に当たりました。非常に経過がよいのを喜んでいきます。一週間前左足の弾片二個を摘出し右手の弾片を抜きとり、傷口は全く直りました。これから右足の

義足をつけ歩行の練習をされるのですが、公使は国民の同情に対し心から感謝をされてをられます。また九大温泉治療研究所の高安博士は、重光公使の入院されることは光栄です。一カ月ぐらいで退院され別府の適当の別荘で今秋ごろまで静養されることでしょう、と語った。

(以下略)

九大温研での療養生活については、作家の豊田穰が『孤高の外相重光葵』の中で「この玄関でも歓迎された重光は、三輪車のまま二回の病室にかつきあげられた。やっと移動の苦痛から解放された重光は、この高台からの展望に大きく息を吸った。松林の向こうには別府湾の青い水、そして廊下を越えて反対側の窓に立てば、鶴見岳の雄大な緑が広がっている。これならば温泉に入浴しなくても、自然の靈気で負傷も治癒してゆくであろう：」「湯につかりながら重光は改めて上海の病院での苦しい手術の頃を思い出していた。そこへ、三月一日に生まれたばかりの華子が母に連れられて父の見舞いにやってきた。」作家である豊田の記述は長女華子を介して重光葵の心情を描いているが病状についての記述はない。

重光葵が別府療養中に記し、長兄あつむ籙氏が上梓して知友に頒

布した『隻脚記』（稿本は憲政記念館蔵―表題は「隻脚公使」向陽山人と記す）の文中に「福岡から別府へ」「篤あつしと華子」と題した文が見える。これが別府療養中の回想であるのはい言うまでもない。豊田穰の『孤高の外相重光葵』によると、

その後、重光は山手の九大温泉治療研究所から、別府北部の亀川・聖人ヶ浜の和田別荘に移ったが、華子は母と一緒にきてきた。ここで華子は（中略）海岸の舟を漕ぐ人を見ては、自分も体をゆすってその真似をして家族を笑わせた。（中略）上海に見舞にきた次男の篤も、その後、別府にきて一緒に暮らした。まだ小学校にもあがっていなかったが、自転車に乗るのが得意で、海岸を走って重光を喜ばせた。

和田別荘滞在中は、親族はもちろん八坂小学校、杵築中学校の同窓生など知人の見舞い客も訪れてくれたが、本人も歩行訓練をかねて各地を訪問している。『重光葵写真集』には、昭和七年十月に八坂の実家へ、十二月には臼杵石仏での記念写真が載っている。また、宇佐神宮に参拝して「ぬかづきてただ祈るなり神前に 正しき国の末を護れと」と短歌を遺している。これは先輩外交官松岡洋右らがスイスのジュネーブ

での国際連盟総会で活躍するのを祈念する為であったという。松岡とは上海事変の停戦協定締結とともに苦勞した仲であった。彼は昭和七年十月十三日付で重光宛に返事の手紙を出している。(重光葵関係文書目録・憲政記念館編集発行・昭和六十二年)

拜復 十日付芳翰只今拝誦、御順調の御様態との事誠に安心、御歩行自由の程度将来重大の關係有之、そのみ氣に掛り居り候処、御来示により欣喜至極に存じ候。御垂示無之とも小生の最も力強き後援は神の外、老兄なる事承知在罷候。クロムウエルは我唯神を恐ると云ひ大西郷は、人を相手とせず天を相手とせよと申され候。此心境にてゼネヴァに赴き申し候。唯神の御前に先ず恐れ慄き自省し自らを正すの用意は因よりの事に御座候。多忙中返書不用の添書有之候得共、已に已まれず敢へてご返事旁得貴意候。 頓首

十月十三日 洋右

重光盟兄

侍曹

追而御令閨様に宜敷御伝言被下度、尚来春帰朝の頃には新春と共に東都にて老兄の温顔に接し得る事と今より

楽み申候。

右の書状は重光の発信に対する返事であるが、その後松岡は和田別荘に重光を訪ねている。リットン調査団の満州事変に関する報告をめぐっての意見を求められたのかも知れないが、重光は次の歌を記している。

神国を背負ひて立たん人の来て

ともに語りて語り尽くせず

昭和八年正月を迎えて、豊州新報紙上に重光公使の顔写真と年頭所感が掲載されている。見出しは「直面の諸困難に殉ずる覚悟」「对支事変に思ひを馳せつ」となっているが、「靈泉と高安博士の御蔭で斯く早く全愈した事を感謝の外ない」と語り

松越に海に燃へ出る初日哉かな

仰ぐ我身は傷癒えにけり

松越に海の表に初日の出

雪の鶴見に光りうつしつ

「この天恵の楽園を人工と調和せしめる事は百万国民の義務である。これを破壊する者は罪悪である。(以下略)」

ところで、是永勉著『別府今昔』(大分合同新聞社・昭和

四十一年五月刊・四二頁)に「カゴで立石山にのぼった重光公使」と題した項目がある。(同書の「完結後記」によると、高齢者からの採話を中心に記事にしたとある。)参考までに略記しておこう。

ちょうどそのころ上海でテロのために足をやられた柁築出身の重光公使が治療のために別府に来ていたが、大蔵の運動(甲斐大蔵の国旗掲揚運動)に大いに共鳴、昭和八年一月一日午前十一時から北町の大蔵自宅内の報徳館で正式に「日章旗掲揚運動」発会式が行われた。これよりさき、記念すべきこの日のために大蔵は十ヶ四方の国旗を和田別荘に投宿中の重光公使のもとに持参、(中略)日の丸の赤の部分为重光に塗ってもらった。(中略)重光公使がカゴにかつがれてこの大和山(立石山を勝手に改名?)にのぼったのは昭和八年三月二十四日だった。重光はケーブル駅の山上駅まではケーブルカー、それから国旗掲揚台までを乙原部落の青年たちのかつぐカゴでのぼった。

ここで私見を加えると、重光公使が別府を離れたのは、次のように三月二十八日であるから、立石山へ登る余裕はなかつ

たと思われる。カゴの件は昭和二年十月十二日に久爾宮邦彦殿下が朝日村の青年たちのカゴに乗って扇山に登山した事実(『別府今昔』四八〇頁)と混同したのではあるまいか。

昭和八年三月二十六日の豊州新報によると「重光公使は愈よ別府引揚げ」との見出しで次のような記事を載せている。

約七ヶ月間に亘り九大別府温泉治療所及び石垣村和田別荘の閑静な楽園で保養中であつたわが郷土の生める偉大な外交官―重光公使はその後全く健康を回復し、気分もすっかり愈へたのでいよいよ二十六日午後六時半別府出帆の商船みどり丸で上京することとなつたが、二十五日朝和田別荘に公使を訪へば、感慨深げに次のように語る。

自分は昨年(昭和七年)の八月一日に福岡の九大病院から石垣村九大温泉治療所に入り経過良好のためにこちら(和田別荘)へ引越したが今日まで百萬県民の身に余る御同情と和未亡人を始め九大の高安、松尾両博士の御蔭を以って意外に早く全快し既に大丈夫といふ処まで漕ぎ着け得たので、国家非常時の今日身命を賭して最後の御奉公をすべくいよいよ二十六日別府温泉を引揚げることになつたが、(後略)

なお公使は本紙を通じ再度縣民諸氏によりしくと附け加へたが、上京と共に畏くも天皇皇后兩陛下より拝謁を仰せ付けられることとなっている。

つづいて同紙三月二十八日付けの一面に「重光公使晴れやかに神戸に上陸」との見出しで、次の記事が載っている。

(一分ルビ省略)

別府市外聖人せいじんヶ鼻はな和田別荘に傷の快癒を待った誉ほまれの隻脚せつぎやく公使重光葵氏は、愈々健康も回復したので、廿七日午前十一時半神戸入港の郵船別府就航みどりまゐ緑丸で喜恵夫人、令息令嬢同伴晴れの入港をなした。(中略)官民多数の出迎へを受け、公使は紺スコッチの背廣に包んだ不自由な身を持って餘しながらステッキに上半身を支え、スラックに現れるや萬歳の聲どよめき(以下略)

なお、当日の豊州新報一面には「愈よ帝国の聯盟脱退通告」
「臨時閣議にて決定す」との見出しが見える。いうまでもなく、スイスのジュネーブ(ゼネバ)における国際連盟総会において松岡洋右全権らが退場し、事実上国際連盟を脱退した事件を受けての記事である。わが国はこの後戦争への道を

歩むこととなり、敗戦後の東京裁判において松岡氏はA級戦犯として裁かれることとなった。松岡全権がジュネーブに出席する前に別府市を訪れ、療養中の重光公使を見舞ったことはすでに述べたが、実は別府市の下野口の吉種別荘に松岡洋右全権大使の実兄が居住していたのである。昭和八年三月九日の豊州新報には「歸朝近い―松岡全権より別府の実兄へ」「ゼネバからの便り」「喜びを語る歡治氏」の見出しが続き、次のような実兄の談話が載っているので蛇足ながら紹介しておきたい。

洋右は幼少の頃から非常に腕白小僧でその上向ふ意気が強い質でしたから、もしや短気でも起こして聯盟加入国の感情を害し脱退の已なきに至ったのではないかと氣遣はれてなりません。(中略)昨年十一月あれがゼネヴァに渡って以来、私等夫婦は朝な夕などんな日でも缺がさず別府公園の宮地嶽神社に参詣し神かけてあれ(弟洋右氏)の健康と帝国の外交戦の勝利を祈っていた。(以下略)

ところで、翌日の豊州新報には吉田茂前伊太利大使が「静養中の重光公使を慰問」した記事が載っているので紹介しておこう。

前伊太利大使吉田茂氏は八日上海より長崎に上陸、九日午後一時十分別府駅着下り準急車で来別、(中略)石垣村聖人ヶ鼻和田別荘に目下静養中の重光公使を訪問、長時間に亘って曾談懇切に慰問の上、同夕刻六時別府出帆の商船重丸すみれで大阪經由京都に向かった。(以下吉田大使の談)

別府には幼少の頃一度来たことがあるが何時来ても風光明媚殊に天恵の温泉は各所に湧出、近時遊覧施設も完備し恂に結構なことだ。之から一風呂浴びて重光君と打ち寛いで去りし日の思いで話をしたいと思ふ。重光君はこんないい所でゆっくり静養したので豫想外に早く全快しこんな嬉しいことはない。

上海を始め各地を七日まで視察して来たが依然排日思想熄まず、特に今回惹起された山海関事件は彼我益々悪化の兆あり(中略)満州事変も何時頃善意的に解決を告げるかは豫断を許さぬ。之から帰京の上視察内容を各大臣に報告するので、調査の要項については一切語れぬ云々

右記の山海関は万里の長城が渤海湾に臨む位置にあり、日本の関東軍が昭和八年正月三日に占拠して中国軍と抗戦状態

が続いていた。吉田大使が重光公使の見舞いを兼ねて、華北(中国)問題を話題にしたのは言うまでもあるまい。山海関事件に端を発した日中間の停戦協定(塘沽協定)タンクが成立したのは五月三十一日で、四月六日に上京した重光公使が外務次官に就任した(五月十六日付)直後のことである。彼の次官在任中に二・二六事件が起こり、岡田啓介内閣が倒れた。その年の昭和十一年十一月に重光は駐ソ大使としてモスクワに赴任し、同十三年十月には駐英大使としてロンドンに赴任した。翌年九月にドイツがポーランドに侵入して第二次世界大戦が始まっている。

重光は昭和十六年七月に帰国し、同年十二月十九日特命全權大使として中華民國勤務を命じられたが、出発前に郷里杵築と安岐へ墓参のために帰っている。

重光葵が別府を拠点として活動することになるのは、戦後の昭和二十七年改進黨総裁として衆議院に議席を持つようになってからである。